(公財)広島市文化財団　文化財課

弥生時代の土笛づくり

弥生時代の土笛について

今からおよそ 2100 年前の弥生時代前期ごろの土笛と考えられているその笛が出土したのは、1966（昭和 41）年、山口県下関市の綾羅木（あやらぎ）郷遺跡でのことでした。

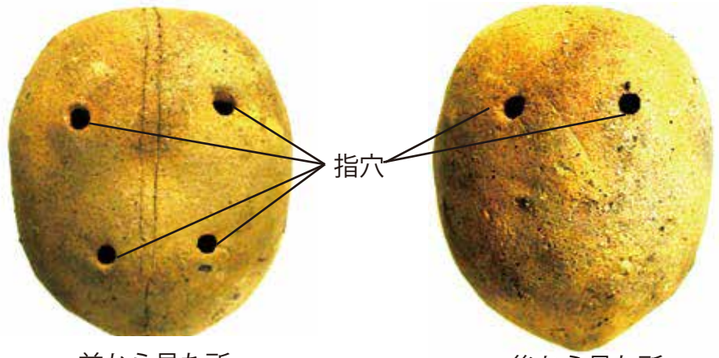
卵形をし、中空で、いくつかの穴があいたこの不思議な土製品は、中国の古代の土笛の名をとって「陶けん」とも呼ばれます。

陶けんは、これまでに主に北九州から山陰、京都府北部にかけての日本海側の遺跡から、約 70 点が出土しています。遠く離れた場所から出土するにもかかわらず、形や模様などには共通性があり、当時この広い地域の間で交流があったことを物語ります。中でも、島根県松江市からは 40 点以上の陶けんが出土しています。

弥生人はどんな時にこの土笛を使ったのでしょうか？　おまつり？子供のおもちゃ？それとも、何かの合図？　それらははっきりとはわかっていません。また、なぜか吹き口が大きすぎて笛としては、使えないものも多く見つかっているのです。そして最大の謎は、弥生時代前期以降、この土笛はつくられなくなったらしいことです。

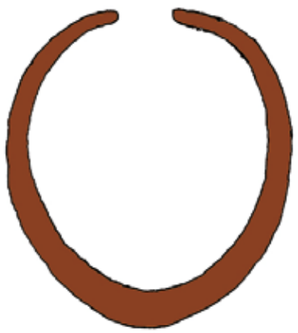
土笛をつくろう

この姿をめざそう



前から見た所　　後から見た所

上から見た所



半分に切った図

この図のように底はやや厚く、なだらかに吹き口にむかってうすくなっていくのが理想の形です

悪い例

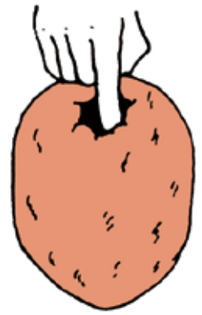
半分に切った時、厚い所、うすい所がないように、また、吹き口の部分が厚すぎないようにしましょう

①粘土を丸めて卵形にします

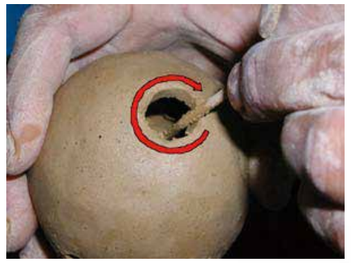
②吹き口をつくる穴から指を入れ、中に空洞をつくっていきます。

吹き口の穴は指１本が入る程度のままひろげずに空洞を大きくしていきましょう。

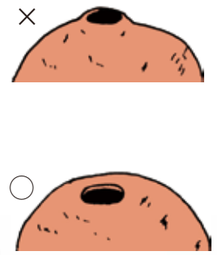
空洞は半分に切った図の理想の形に仕上げていきましょう。



③空洞ができたら、吹き口を直径１㎝程度にすぼめます



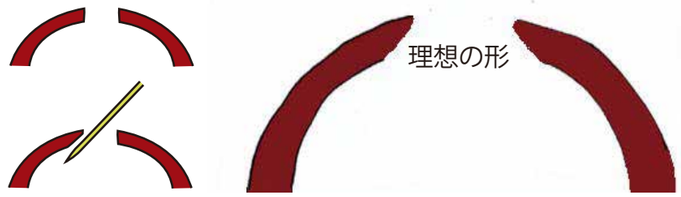
④ぬらした竹ぐしで吹き口を円形にします



吹き口はでっぱらないようにしましょう

⑤吹き口の調整をします。

ぬらした竹ぐしをななめに吹き口にさしこんで粘土をけずり、半分に切った時の吹き口の形を図のようにしましょう



⑥吹いてみて音が出るように調整します。

写真のように吹き口にななめに息が吹き込めるように、くちびるの下側を土笛につけ、よく音が出る位置を探して吹く角度を色々と変えて、口笛を吹くような感じで息を吹きこみます。

吹きすぎるとふらふらしますので、休みながら！

⑦写真のように持ってみて、爪で指穴を明ける位置に印をつけ、竹ぐしで穴を開けて適当な大きさにひろげます。

吹き方

（前）４つの指穴を両手の人差し指と中指で押さえる。
（後ろ）２つの指穴を両手の親指で押さえる。
一つずつ指をはなして穴を開くと音階が変わる。
ただし、全部開くと音はでにくい。